

中国語無マーカ―受身文の意味分析と形式上の特徴

杜 暉

Abstract

This thesis analyses the previous research and key issues of non-marked passive sentences in Chinese. By investigating example sentences, it demonstrates that non-marked passive sentences of the transitive verb mean ‘neutrality’, while those of the intransitive verb mean ‘suffer’ or ‘benefit’. The thesis analyses the characteristics of non-marked passive sentences in forms, discovering that the agent in non-marked passive sentences of the transitive verb can be omitted but that in non-marked passive sentences of the intransitive verb cannot. Meanwhile, non-marked passive sentences of the transitive verb can be changed into marked passive sentences and active sentences, while non-marked passive sentences of the intransitive verb cannot be changed. The thesis demonstrates that supplementary elements which show the influence on the patient is a prerequisite for composing non-marked passive sentences, and analyses various supplementary elements in detail.

キーワード……無マーカ―受身文 意味 付加成分

1 はじめに

現代中国語の受身文は有マーカ―受身文と無マーカ―受身文の二種類に分けられている（王力（1985）、劉月華・潘文娛・故鞏（1991）、趙清永（1993）、王灿龙（1998）、王振来（2009）、三宅（2009））¹⁾。有マーカ―受身文には、“被”（BEI）、“给”（GEI）、“叫”（JIAO）、“让”（RANG）のような、受身を表す形式的マーカ―が存在する。一方、(1)のような無マーカ―受身文には受身マーカ―は現れないが、意味的には受身を表す。

(1) 蚕房早已收拾好了。（蚕の部屋はとっくに片づけられた。）

《春蚕》

中国語では無マーカ―受身文の使用頻度が高く、その構文的特徴は多様であり、用法も複雑である（李珠（1989）、劉月華・潘文娛・故鞏（1991））。多くの研究者が中国語の有マーカ―受身文に焦点を当てて論じているものの、無マーカ―受身文についてはまだ詳細で系統的な研究成果が出されていないように思われる。

ここで日本語の受身を比較対照として取り上げてみる。日本語では普通「れる・られる」という標識で受身文を作る。一方で日本語には「問題は解決した」のような標識がない受身文（即ち無マーカ―受身文）も存在する（潘金生（1984）、張曉帆（2008）、川本・陳茜（2012））。しかしながら、中国語の無マーカ―受身文は日本語母語話者によってよく誤用されることが観察されている（郭春貴（2001）、魯宝元（2005））。これは日本語無マーカ―受身文の構成形式は中国語無マーカ―受身文と同じように見えるものの、実際には翻訳する時に、完全に対応しているわけではないことが理由であると考えられる。どのような意味を表す時に中国語無マーカ―受身文が適格なのか、また、無マーカ―受身文の各構成要素がどのような条件により制限されているのか、本稿は先行研究を踏まえて、日本語母語話者の誤用を分析しながら、これらの問題を明らかにしたい。

2 先行研究と問題点

本章では、中国語の無マーカ―受身文についての先行研究とその問題点を分析する。

2.1 王力（1985）

王力（1985:91）はどのような場合に無マーカ―受身文が用いられるかという視点から、(2)のように二つの条件を提案している（カッコ内には筆者による日本語訳を示す）。

- (2) a. 主事者无说出的必要，或说不出主事者为何人。（施事を言う必要がない、あるいは施事を言い出せない場合²⁾。）
- b. 主语为无生之物，无所谓不如意或不企望的事。（主語が無情物である場合³⁾。この場合、無情物にとって不本意である、あるいは待ち望んでいないとは言えない。）

王力（1985:91）は二つの条件のうちどちらかの条件に合致すれば、無マーカ―受身文を用いることができると指摘した。しかしながら、(2a)の条件に合っている次の(3)では有マーカ―受身文のみが可能である。

- (3) 钱包{被/*φ}偷了。（財布は盗まれた。）

(3)の施事は通常「泥棒」であるので、言う必要がないという(2a)の条件に合致する。しかしながら、有マーカ―受身文で表現する必要があり、無マーカ―受身文は不適格である。

無マーカ―受身文の意味について、(2b)に述べられているように、主語が無情物である場合

には、無マーカ―受身文で表現すると捉えられているが、主語が有情物の場合に、無マーカ―受身文はどのような意味を表現できるかについては王力(1985:91)は説明していない。しかし、(2a)、(2b)で挙げられた要素は無マーカ―受身文と一定の関わりがあると考えられるため、のちほどこの点から無マーカ―受身文の特徴を論じたい。

2.2 相原・石田・戸沼 (1996)

相原・石田・戸沼 (1996:304-307) は『中国語の文法書』の中で中国語教育の立場から無マーカ―受身文について以下の論述をしている。

無マーカ―受身文は意味上の受身文である。例えば「手紙をすでに書き上げてしまった」のような場合、日本語では普通には「手紙はもう書き終わった」と言い、「手紙はもう書き終えられた」といちいち受身で言う必要はない。中国語も同じである。

(4) 信{*被 / φ}我已经写完了。(手紙はすでに私によって書き終えられた。)

(相原・石田・戸沼 1996)

意味上の誤解が生じるはずのない場合、同様に、次のように言う。

(5) 菜已经做好了。(料理はもうでき上がった。)

(同上)

このタイプを相原・石田・戸沼 (1996:304-306) は「意味上の受身文」と呼んでいる。同様の例には、(6)や(7)がある。

(6) 麦子我们运走了。(麦は私たちが運んだ。)

(同上)

(7) 车票他已经买了, 你不用担心。(乗車券は彼がもう買ったから心配しないで。)

(同上)

これらを“被”を用いた有マーカ―受身文で表現すると、(8)や(9)のように、「被害を被った」あるいは「不本意だ」という気持ち加わると相原・石田・戸沼 (1996:306-307) 指摘している。

(8) 麦子被敌人运走了。(麦は敵に持ち去られてしまった。)

(同上)

(9) 车票都被他们买了。(乗車券は彼らに買われてしまった。)

(同上)

相原・石田・戸沼 (1996) は日本語無マーカ―受身文を挙げて、対応している中国語無マーカ―受身文を紹介している。無マーカ―受身文の使用条件について、「誤解の生じるはずのな

い場合」と指摘しているが、具体的にどのような場合に誤解が生じないのか説明されていない。興味深いのは、「受身マーカー“被”を無マーカー受身文に入れると、不本意な気持ち加わる」という論述は王力(1985:91)(2b)の条件と同じ観点にたっていると考えられることである。しかし、不本意なのは主語が指示している受事にとってなのか、あるいは話者にとってなのか、果たしてだれにとって不本意であるか待ち望まないことであるのかということについて、ここでははっきりとは説明されていない⁴⁾。

2.3 劉月華・潘文娛・故韡（1991）

劉月華・潘文娛・故韡（1991:641-642）は無マーカー受身文の構造と語順は一般の能動文と同じであると指摘し、無マーカー受身文の判定基準について、「中国語には意味上の受動文が非常に多く存在するが、どのようにして文が能動文か受動文かを判断するかは、通常表出した意味に依って判断するしかない。受動文の主語は動作の受け手であり、多くは事物なので、普通は述語動詞が表す動作を行うことができず、行い手（施事）と誤解されることはない。主語が人や動物等、動作を行い得る存在ではないことが文脈から明らかであれば、やはり動作の受け手としてしか主語は存在し得ない」と論述している。

この判定基準に基づいて、無マーカー受身文の使用条件を考察してみる。主語は受事であり、その受事が文の述語にある動詞が表す動作をできない場合に該当し、施事と誤解されることがあり得ないときは、無マーカー受身文を用いると解釈できる。しかしながら、下記の例を考えよう。

(10) 孔子三岁上就死了父亲。（孔子は三歳の時に父親に死なれた。）《中国儿童百科全书》

(10)のような場合について考えると、“孔子”（孔子）は“死”（死ぬ）という動詞が表す状態変化を行える条件は備えており、施事であると解釈される可能性がある。劉月華・潘文娛・故韡（1991:641-642）の無マーカー受身文についての研究は、(10)のような例に言及しておらず説明できない。本稿では、さらに多くの例を分析して、無マーカー受身文の使用条件を論述したい。

2.4 三宅（2009）

三宅（2009:38）は例(11)を挙げて、無マーカー受身文は介詞（前置詞）等の明確な受身を表す語彙を用いず受身の意味を表すとされるもので、従来「自然被動文」、「意味上の受身文」等の名称で呼ばれてきたタイプの文であると指摘している。

(11) 问题解决了。（問題は解決した。）

（三宅 2009）

三宅（2009:56）は無マーカ―受身文の成立条件について、述語動詞の付加成分が必要になると指摘している。そして、三宅（2009:58）は無マーカ―受身文の表す事態を次の図 1 で説明している。

(12) 杯子打碎了。（グラスは割れた。） (同上)

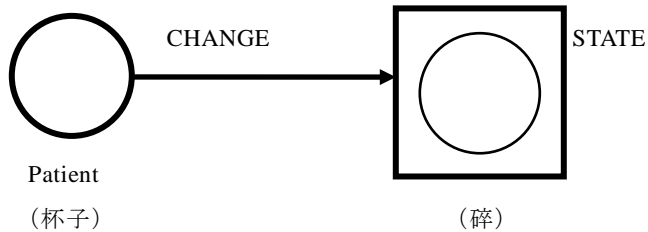


図 1

(同上)

図 1 は、誰かがグラスを割ったといったような事態を表す。施事が、受事であるグラスに対してエネルギーの伝達を行う。このエネルギーを与えられた結果、受事の状態が変化する。この変化が CHANGE であり、図 1 では一重矢印で表す。その結果、「グラスが割れてしまっている状態」が STATE で、図 1 では四角囲みで表記する。無マーカ―受身文においては、発生した客観的な事実としてはたとえその出来事を引き起こした施事が存在しているとしても、話し手がその施事の存在を考慮に入れず、あたかも施事なしで、受事自身に自発的な変化が発生したかのような概念化をした表現であることが言えると三宅（2009:58）は説明している。

三宅（2009）は無マーカ―文の述語動詞は付加成分が必要であると指摘しているが、どのような付加成分が必要であるかについて詳しく説明していない。さらに、三宅（2009）は自動詞で構成された無マーカ―受身文に言及していない。本稿では三宅（2009）の有マーカ―受身文の付加成分の分類方法を土台にして、無マーカ―受身文の付加成分分析を試みる。また、三宅（2009:38-58）による図 1 のような事象構造の図を参考にして、無マーカ―受身文の各構成要素を表す図を作成することにより、理解しやすい説明方法を探究したい。

3 日本語母語話者の誤用

李珠（1989）、郭春貴（2001）、呉門吉・周小兵（2005）、劉姝（2005）は中国語教育実践の視点から中国語受身表現を分析し、日本語を母語とする中国語学習者が受身文について犯す

誤りは無マーカ―受身文が理解しにくいことと関係があると指摘している。

3.1 他動詞無マーカ―受身文

次は郭春貴（2001）によって日本語母語話者が中国語受身文を作る際の誤りとして指摘されている例である。

- (13) 开学典礼4月5日{*被 / φ}举行。(入学式は4月5日に行われた。) (郭春貴 2001)
- (14) 黑板已经{*被 / φ}擦干净了。(黑板は拭かれてきれいになった。) (同上)
- (15) 那个教堂是一百年前{*被 / φ}建的。(その教会は百年前に建てられた。) (同上)
- (16) 那封信是前天{*被 / φ}写的。(その手紙は一昨日に書かれた。) (同上)

以上の例では、“被”が用いられるときには、文が成立しないことがわかる。呉門吉・周小兵（2005）は、無マーカ―受身文を使うべき場合でも、多くの学習者が“被”構文を誤って使用していることを指摘している。呉門吉・周小兵（2005）が調べたデータによると、「部屋はきれいに掃除した」という意味を表す際、中国語では本来無マーカ―受身文で表現すべきであるが、50%以上の学習者が“被”の有マーカ―受身文で表した。劉姝（2005）が挙げた日本語母語話者の誤用例文のうち、約33%は本来不要の“被”を用いたことによる誤用である。日本語母語話者は中国語の受身文を作る際、しばしば受身マーカ―に依存する結果、“被”を多用する傾向があることが観察されている。これは日本語母語話者自身の母語の影響であると考えられる。

郭春貴（2001）によって、(13)-(16)の“被”を用いた有マーカ―受身文は全て誤文と認定されているが、特別な含意のある場合には、“被”を用いた文も言えるという事実がある。例えば、(14)の場合、話者は黑板に書いた内容をメモしなかったのに、黑板はきれいに拭かれて、メモできなかったという状況、つまり、話者にとっての「不本意」、「被害」の意味を表す時には、(17) “被”の有マーカ―受身文で表現するのが適切である。

- (17) 黑板已经被擦干净了。(黑板はもうきれいに拭かれてしまった。)

(13)-(16)はいずれも、述語動詞が他動詞である。これらの例にどのような共通点があるか分析してみよう。(13)-(16)の主語、すなわち受事はすべて意識がない無情物であり、述語動詞が表す動作はできないことが観察される。例えば、(13)の“开学典礼”（入学式）は“举行”（行う）という動作ができない。また、(14)の中の“黑板”（黑板）は“擦”（拭く）という動作ができないので、主語“开学典礼”（入学式）、“黑板”（黑板）は動詞“举行”（行う）、“擦”（拭く）との関係は明らかであり、主語はその動作の受け手という関係としてのみ扱わ

れる。(13)-(16)では、全て「被害」の意味が表現されていない。受身表現は受事に影響を与えるという意味を表すので、一般的に、受事にとって好ましいかどうかの問題となる可能性がある。しかしこれらの例の受事は意識がない無情物なので、その無情物には「本意」、「不本意」という感覚が感じられない。ただし、有マーカ―受身文の場合、(17)のように、受事が無情物で、話者にとって「不本意」、「被害」の意味を表す例もある。

3.2 自動詞無マーカ―受身文

自動詞で構成された無マーカ―受身文について、劉姝(2005)では次の例が日本語母語話者の受身に関する誤りとして指摘されている。

- (18) 每天都{*被 / φ}有人来，没办法看书。(私は毎日誰かに来られて、勉強できない。)
(劉姝 2005)

(18)のような、述語動詞が自動詞の場合、有マーカ―受身文では表現できないと思われる。(18)の省略された主語「私」は意識がある有情物で、「人が来る」という状況からの影響の受手(即ち受事)として捉えられる。

4 無マーカ―受身文の意味

本稿における意味とは無マーカ―受身文の中の各語彙それ自身の意味を指すのではなく、ヴォイスの観点から分析される受身文という文型が表す意味を指す。すなわち、無マーカ―受身文を「被害」、「中立」、「受益」の意味を表したい場合に用いることができるかという問題が分析対象に含まれることになる。この点について、受身文の受事が無情物の場合、無情物には「被害」と「受益」の感覚がなく、受事の影響からこれらを判断することは難しいため、一般的には「中立」の意味と判断する。

4.1 他動詞無マーカ―受身文

ここまでに本稿で挙げた他動詞無マーカ―受身文の例文((1)、(3)、(4)-(7)、(11)-(16))では例外なく、受事が無情物で、「中立」の意味を表している。有マーカ―受身文は主に「被害」の意味を表すが、これに対して、他動詞無マーカ―受身文の使用は「中立」の意味を伝達するときに適している。

4.2 自動詞無マーカ―受身文

自動詞受身文の例文(11)に加え、さらに以下の例を見てみよう。

(19)(=18))

每天都{*被 / φ}有人来，没办法看书。

（劉姝 2005）

（私は毎日誰かに来られて、勉強できない。）

(20) 母亲来了，有人照顾孩子，我可以专心学习了。

（お母さんが来てくれて、子供の世話してもらって、学習に専念できた。）

(21)(=10))

孔子三岁上就死了父亲。（孔子は三歳の時に父親に死なれた。） 《中国儿童百科全书》

(22) 太郎跑了老婆。（太郎は妻に逃げられた。）

(19)、(20)は形式上では施事を自動詞の前に置く普通の語順の文である。本稿ではこのような文を「通常自動詞無マーカ―受身文」と呼ぶ。一方で(21)、(22)のような自動詞をその施事の前に置く文は「自動詞前置無マーカ―受身文」と呼ぶ。(19)は「私」は「人が来る」という状況の影響を受けて、「勉強できなかった」ことを表し、受事の「私」にとっては「被害」の意味である。(20)では、「私」は「お母さんが来る」という状況の影響を受けて、「学習に専念できた」ことを表し、受事の「私」にとっては「受益」の意味である。通常自動詞無マーカ―受身文で表す意味は受事にとっての「被害」または「受益」の意味である。一方、(21)、(22)が示すように、自動詞前置無マーカ―受身文の表す意味は受事にとって「被害」の意味でしか捉えられない。興味深いのは、受事への影響が「中立」の意味を表す自動詞無マーカ―受身文の例文は小説や言葉コーパスに見られないことである。これは、自動詞無マーカ―受身文は全て受事が有情物のため、「中立」という影響は想定しにくいためであると考えられる。

5 無マーカ―受身文の形式上の特徴

本章では、三宅（2009）の事象構造図に基づいて、無マーカ―受身文における施事動作の働きかけの方向と受事が影響を受ける方法及びその状態変化を表す図を作り、無マーカ―受身文形式上の特徴を説明する。本稿ではこれらの図を「受影構造図」と呼ぶ。

三宅（2009）の事象構造の解釈と異なり、本稿では無マーカ―受身文においては施事を明示しない場合でも、受事に自発的な変化が発生したのではなく、外的な影響によって一定の状態になったと考える。受影構造図において、太線の中の内容は省略できず、細線の中の内容は省略できることを表している。実線の矢印は受事に何らかの動作・行為・状況により影響を与えることを表す。点線の矢印は受事の状態の変化を表す。

5.1 他動詞無マーカ―受身文

(23) 衣服我叠好了。(服は私がきちんと畳んでおいた。)

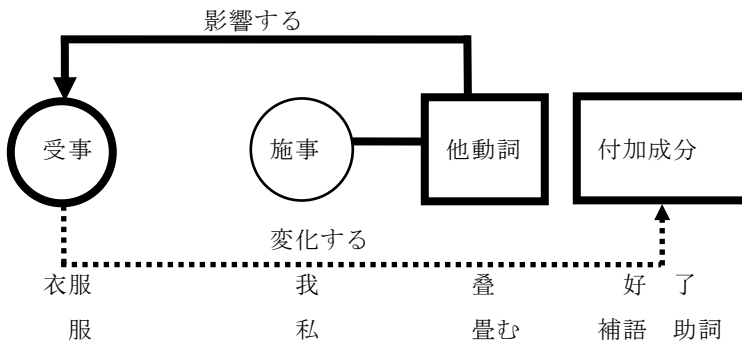


図2 他動詞無マーカ―受身文の受影構造図

図2のように、施事「私」は動詞「畳む」で表す動作を通して直接受事「服」に影響する。他動詞無マーカ―受身文は直接受身文である。

5.1.1 受事と施事

(23)が示すように、受事「服」は意識がない無情物で、受事「服」は「畳む」という動作の行為者にならないので、受事とその動作の関係は曖昧ではない。すなわち、他動詞無マーカ―受身文の受事は無情物で、述語動詞が表す動作との関係は曖昧ではない。

(23)の施事「私」を省略されても、文が成立する。これは文の焦点は受事の状態変化なので、施事は背景化されたためであると考えられる。すなわち、他動詞無マーカ―受身文の受事は無情物で、省略することができる。

5.1.2 文型転換

(23)を“被”を用いた有マーカ―受身文で表現すれば、(24)のような文が成立する。

(24) 衣服被我叠好了。(服は私が畳んでしまった。)

しかしながら、(24)では「私が服を畳んだ」ことは話者にとって「好ましくない」という意味がある。すなわち、他動詞無マーカ―受身文は有マーカ―受身文に転換することはできるが、その際には必ず「被害」の意味が生じる。

(23)を能動文へ転換すると、(25)のような文が成立する。

(25) 我把衣服叠好了。（私は服をきちんと畳んでおいた。）

他動詞無マーカ―受身文は能動文に言い換えることができる。

5.1.3 付加成分

無マーカ―受身文は受事への影響を表す付加成分がないと、成立できない。本節では、三宅（2009）の有マーカ―受身文の付加成分についての研究と文法書や辞典類の挙げている項目に基づいて、他動詞無マーカ―受身文の付加成分を分析する。

「結果補語＋“了” / “已经”」

中国語では、“完”、“光”、“好”など結果補語を動詞の直後に置いて、その動詞が表す動作行為が行われた結果を表す。以下は、これらの結果補語が用いられる無マーカ―受身文の例である。

(26) a. 这本书看完了。
b. 这本书已经看完。
c.*这本书看完。
（この本は読み終わった。）

(27) a. 钱用光了。
b. 钱已经用光。
c.* 钱用光。
（お金は使い切った。）

(28) a. 饭做好了。
b. 饭已经做好。
c.*饭做好。
（ご飯はできた。）

(26)-(28)のような、結果補語“完”、“光”、“好”は無マーカ―受身文の付加成分の一部として用いられる。これらの結果補語の後ろにアスペクト助詞“了”が付けられるか、あるいは動詞の前に副詞“已经”が付けられると、無マーカ―受身文が構成される。

「結果動詞＋“了” / “已经”」

中国語では“解決”、“完成”、“删除”のように動詞自身で結果を表すことができる動詞

がある。本稿では、このような動詞を「結果動詞」と呼ぶ。

- (29) a. 问题解决。 《CCL 语料库》
 b. 问题已经解决。
 c.*问题解决。
 (問題は解決した。)
- (30) a. 小说完成了。 (同上)
 b. 小说已经完成。
 c.*小说完成。
 (小説は完成した。)
- (31) a. 文件删除了。 (同上)
 b. 文件已经删除。
 c.*文件删除。
 (文書は削除された。)

(29)-(31)のような、結果動詞は結果補語を伴っていない場合でも、後ろに付けるアスペクト助詞“了”、あるいは前に現れる副詞“已经”と組み合わせて、無マーカ―受身文を形成する。

「“过”」

中国語では、アスペクト助詞“了”または副詞“已经”を用いない無マーカ―受身文として以下のような例が存在している。

- (32) a. 这匹布染过。 (同上)
 b.*这匹布染。
 (この布は染めてある。)
- (33) a. 这件衣服洗过。
 b.*这件衣服洗。
 (この服は洗ってある。)

(32)、(33)が示すように、助詞“过”と組み合わせて、「染める」は「この布」の状態を変え、「洗う」は「この服」の状態を変える。すなわち、動詞の表す動作が受事の存在状態を変える場合、動詞の後ろにアスペクト助詞“过”を付けると、無マーカ―受身文が構成される。

「残存動詞+“着”」

中国語では“保存”、“留”のような受事状態をそのまま持続させる意味を表す動詞がある。

中国語無マーカー受身文の意味分析と形式上の特徴（杜暉）

本稿では、このような動詞を「残存動詞」と呼ぶ。

- (34) a. 那些资料一直保存着。
b.*那些资料一直保存。
(それらの資料はずっと保存してある。)
- (35) a. 饭菜还留着。
b.*饭菜还留。
(ご飯はまだ置いてある。)

(34)、(35)を観察すると、残存動詞はアスペクト助詞“着”と結びついて、無マーカー受身文の付加成分になることがわかる。

「“得”＋様態補語」

様態補語は動詞の後に助詞“得”を介してその動作の程度や結果の様態を表す補語である（三宅 2009:43）。本稿では様態補語は二種類に分けられる。

A. “得”＋動詞の様態補語

- (36) 老通宝气得说不出话来。（通宝おじさんは怒りで言葉を口に出せない。） 《春蚕》
(37) 五儿吓得哭哭啼啼。（五児は驚かされて泣いた。） （王力 1985）

B. “得”＋形容詞の様態補語

- (38) 小说写得很精彩。（小説はいきいきと描写されている。）
(39) 房间打扫得很干净。（部屋はきれいに掃除された。）
(40) 这个港口开放得比较早。（この港が開放されたのは比較的早い。）

(36)-(40)の観察を通じて、助詞“得”と様態補語を組み合わせて、無マーカー受身文の付加成分になることがわかる。

「時間」を表す副詞成分

中国語には、以下のような無マーカー受身文が存在している。

- (41) 新交通法下个月施行。（新しい交通法は来月から施行される。）
(42) (= (13))

开学典礼 4 月 5 日 举行。

(郭春貴 2001)

(入学式は 4 月 5 日に行われた。)

(41)、(42)のような、動作を行う時間を説明したい場合、動詞の前に時間を表す付加成分を明示すれば、無マーカ―受身文を成立させることができる。

5.2 自動詞無マーカ―受身文

5.2.1 通常自動詞無マーカ―受身文

通常自動詞無マーカ―受身文は以下の事象構造図のように説明できる。

(43) 我朋友来了，没能学习。(友達に來られて、勉強できなかった。)

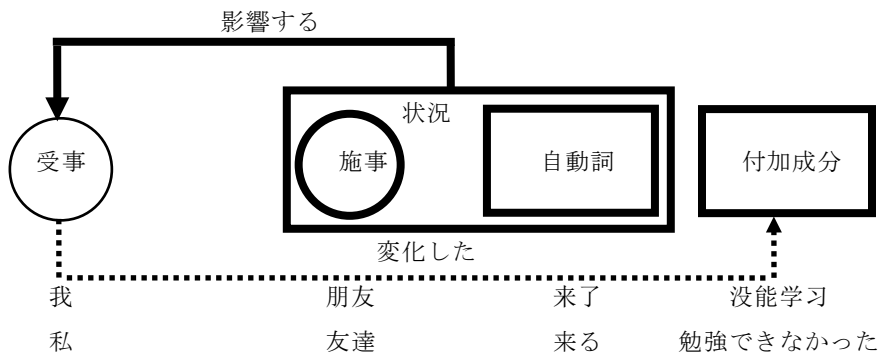


図 3 通常自動詞無マーカ―受身文の受影構造図

図 3 のように、施事「友達」が動詞「来る」で表す動作を通して直接受事「私」に影響を及ぼすことを表しているのではなく、施事「友達」自身による動詞「来る」によって引き起こされた状況が「私」に影響することを表す。従って通常自動詞無マーカ―受身文は間接受身文である。

5.2.1.1 受事と施事

(43)が示すように、受事「私」は意識がある有情物である。受事「私」も「来る」という動作の行為者になれるので、受事とその動作の関係は曖昧である。

(43)の施事「友達」を省略すると、(44) のように文は成立できない。

(44) *我来了，没能学习。

すなわち、通常自動詞無マーカー受身文の施事は意識がある有情物で、省略できない。

5.2.1.2 文型転換

(43) を有マーカー受身文へ転換すると、(45) のように文成立できない。

(45) *我被朋友来了，没能学习。

通常自動詞無マーカー受身文は有マーカー受身文に変えることができない。

(43) を能動文へ転換すると、(46) のように、文が成立できない

(46) *朋友把我来了，没能学习。

通常自動詞無マーカー受身文は能動文に言い換えることができない。

5.2.1.3 付加成分

以下は、通常自動詞無マーカー受身文の例である。

(47) a. 朋友来了，不能外出了。（友達に來られて、出かけられなくなった。）

b. 朋友来了。（友達が来た。）

(48) a. 她孩子哭了一夜，所以没睡成。（彼女は子供に一晩中泣かれて、眠れなかった。）

b. 她孩子哭了一夜。（彼女の子供は一晩中泣いた。）

(49) a. 小兰的鸟飞走了，伤心得不行。（蘭さんは鳥に飛び去られて、非常に悲しくなった。）

b. 小兰的鸟飞走了。（蘭さんの鳥は飛び去った。）

(50) a. 开会的时候，旁边的人抽烟，我觉得身体很不舒服。（魯宝元 2005）

（会議の間、隣の人にタバコを吸われて、気分が悪くなった。）

b. 开会的时候，旁边的人抽烟。（会議の間、隣の人がタバコを吸った。）

(47b)-(50b)は、“不能外出了”（出られなくなった）、“没睡成”（眠れなかった）、“伤心得不行”（非常に悲しくなった）、“觉得身体很不舒服”（気分が悪くなりました）という影響を受けた後の結果・状態を表すフレーズがないと、(47b)-(50b)の主語は動作を行う側である“朋友”（友達）、“孩子”（子供）、“鸟”（鳥）、“旁边的人”（隣の人）になり、受身

文と捉えることはできなくなると考えられる。

通常自動詞無マーカ―受身文は受事が影響を受けた後の結果・状態を表すフレーズという付加成分が必要であると考えられる。

5.2.2 自動詞前置無マーカ―受身文

自動詞前置無マーカ―受身文は以下の受影構造図のように説明できる。

(51) 张三死了父亲，伤心欲绝。（张三に父に死なれ、悲しみに打ちひしがれた。）

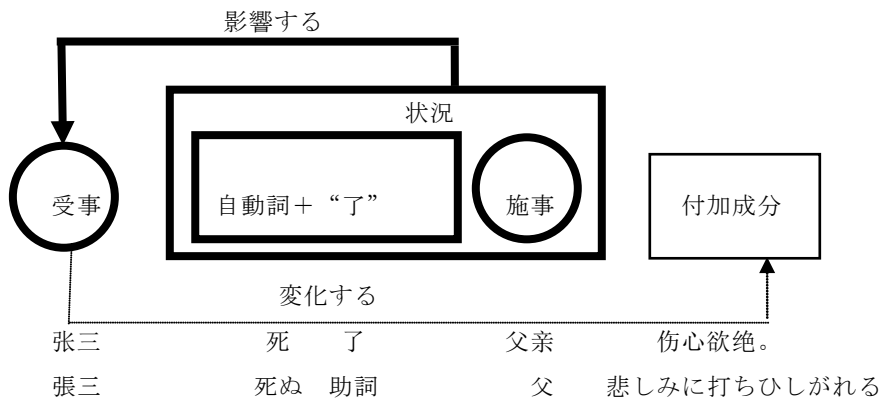


図4 自動詞前置無マーカ―受身文の受影構造図

図4のように、施事「父」が動詞「死ぬ」で表す動作を通して直接受事「私」に影響を及ぼすことを表しているのではなく、「父」自身によるその動詞「死ぬ」によって引き起こされた状況が「私」に影響することを表す。自動詞前置無マーカ―受身文は間接受身文である。

5.2.2.1 受事と施事

自動詞前置無マーカ―受身文の受事と施事は意識がある有情物に限られる。受事と施事の関係について、以下の例を考えてみよう。

(52) *张三死了李四。（张三に李四に死なれた。）

(53) *太郎跑了花子。（太郎は花子に逃げられた。）

(52)、(53)では、受事“张三”（张三）と施事“李四”（李四）”、また受事“太郎”（太郎）と施事“花子”（花子）”の関係は明示されていないため、もし、親しい人間関係がないと仮定するならば、“张三”（张三）、“太郎”（太郎）にとって、“李四”（李四）”、“花子”

（花子）”は知らない人であり、“李四”（李四）”、“花子”（花子）”自身の変化が“张三”（张三）、“太郎”（太郎）に影響を及ぼすことができるとは想定され得ず、文は成立できない。そのため、自動詞前置無マーカー受身文の施事には以下の特徴がある。施事はその自身と受事の関係を示しており、通例は“父亲”（父親）、“母亲”（母親）、“丈夫”（夫）、“妻子”（妻）、“儿子”（息子）、“女儿”（娘）などの親密な人間関係がある人物が自動詞前置無マーカー受身文の施事となる。自動詞前置無マーカー受身文の受事と施事は省略できない。

5.2.2.2 文型転換

(51) を有マーカー受身文へ転換すると、(52) のように、文が成立できない。

(52) *张三被死了父亲，伤心欲绝。

自動詞前置無マーカー受身文は有マーカー受身文に変えることができない。

(51) を能動文へ転換すると、(53) のように、文が成立できない

(53) *张三把死了父亲，伤心欲绝。

自動詞前置無マーカー受身文は能動文に言い換えることができない。

5.2.2.3 付加成分

自動詞前置無マーカー受身文の付加成分について、以下の例を考えてみよう。

(54) a. 张三死了父亲。

b.*张三死父亲。

（張三は父に死なれた。）

(55) a. 老王跑了老婆。（王さんは奥さんに逃げられた。）

b.*老王跑老婆。

(54)、(55)のように、前置自動詞の受身文では施事と受事の関係が密接で、施事と動詞が表す「父が死ぬ」、「奥さんが逃げる」という状況は受事「张三」、「王さん」に対する影響の結果と見られるので、助詞“了”以外に、ほかの付加成分は必要ではない。

6 まとめ

本稿は中国語無マーカ―受身文を他動詞無マーカ―受身文と自動詞無マーカ―受身文に分けて、各文型の意味を分析した。他動詞無マーカ―受身文は「中立」の意味を表し、自動詞無マーカ―受身文は「被害」、「受益」の意味を表す。受影構造図を作成し、無マーカ―受身文の受事と施事、他の文型への転換、付加成分を分析して、無マーカ―受身文の形式上の特徴を明らかにした。これらの特徴を理解することで、中国語で受身を表現する際に、無マーカ―受身文あるいは有マーカ―受身文のどちらを用いるのか、また、各種類の無マーカ―受身文を使用する上での注意点の把握が容易になると思われる。

いずれの種類が無マーカ―受身文も結果・状態を表す付加成分が必要であり、話者が無マーカ―受身文を使う際は、動作を行うことより、受事の最後の状態に注目しているのであろうと考えられる。

<注>

- 1) 劉月華・潘文娛・故讎(1991)、王振来(2009)、三宅(2009)は無マーカ―受身文を「意味上の受身文」と呼ぶ。
- 2) 本稿における施事とは述語動詞が表す動作の主体で、一般的には「動作主」と呼ばれるが、述語動詞が自動詞の場合、具体的な動作から受事に影響を与えるのではなく、「動作主」の何らかの状況から影響を与えることとなる。この影響を受事に与えるものを表すためには、「動作主」より「施事」と呼ぶのが適切であるため、本稿では「施事」という用語を用いることにする。
- 3) 本稿における無情物とは自身に意識、感覚がない事物を指す。それに対して、意識があり、本意不本意か好ましいかどうかという影響を捉えられるものを有情物と呼ぶことにする。
- 4) 本稿における受事とは述語動詞が表す動作や影響を受ける主体、一般的に「受け手」や「受動者」と呼ばれるが、中国語ではその主体は人間に限らないため、本稿では「受事」という用語を用いる。

<引用文献>

- 相原茂・石田知子・戸沼市子 1996.『中国語の文法書』, 同学社
- 潘金生 1984.「中日両国語の比較一次動詞「被 bei」を使う受動文と意味上の受動文をめぐって一」, 『金田一春彦博士古稀記念論文集』第2巻, 三省堂, 526-538 頁
- 川本栄三郎・陳茜 2012.「日本語と中国語の受動表現の比較―感情移入(心理的態度)の表現方法比較一」, 『岩手大学人文社会科学部紀要』第87号, 1-15 頁
- 郭春貴 2001.『誤用から学ぶ中国語―基礎から応用まで一』, 白帝社
- 鲁宝元 2005.《日汉语言对比研究与对日汉语教学》, 华语教学出版社
- 李珠 1989.〈意义被动句的使用范围〉, 《世界汉语教学》第3期, 25-27 頁
- 刘姝 2005.〈汉日被动句谓动词比较——日本学生汉语“被”字句偏误兼析〉, 《云南师范大学学报》第5期, 54-57 頁

中国語無マーカー受身文の意味分析と形式上の特徴（杜暉）

三宅登之 2009. 「行為連鎖の観点から見た中国語の“被”構文」, 『語学研究所論集』第 14 号, 33-64 頁

劉月華・潘文娛・故韡 1991. 『現代中国語文法総覧（下）』（相原茂監訳）, くろしお出版

王灿龙 1998. 〈无标记被动句和动词的类〉, 《汉语学习》第 5 期, 15-19 頁

王力 1985. 《中国现代语法》, 商务印书馆

王振来 2009. 〈现代汉语被动标记的功能〉, 《辽宁师范大学学报》第 3 期, 88-91 頁

吴门吉・周小兵 2005. 〈意义被动句与“被”字句习得难度比较〉, 《汉语学习》第 1 期, 62-65 頁

张晓帆 2008. 〈日语中的自动词意义被动句〉, 《日语学习与研究》第 6 期, 25-30 頁

赵清永 1993. 〈对被动句的再认识〉, 《北京师范大学学报》第 6 期, 98-103 頁

＜例文出典＞

《CCL 语料库》, 北京大学汉语语言研究中心

《春蚕》茅盾, 人民美术出版社, 2004 年出版

《中国儿童百科全书》, 龚勋编, 汕头大学出版社, 2009 年出版

※ 出典が明記されていない例文と日本語訳は筆者による例である。

主指導教員（朱繼征教授）、副指導教員（大竹芳夫教授・江畑冬生准教授）